

機関番号：12611  
 研究種目：研究活動スタート支援  
 研究期間：2009 ～ 2010  
 課題番号：21820013  
 研究課題名（和文） 十六～十八世紀のメッカ・シャリーフ政権および紅海貿易に関する動態的研究  
 研究課題名（英文） The Meccan Sharifate and the Red Sea Trade from the sixteenth century to the eighteenth century  
 研究代表者 山田 啓子（太田 啓子）(YAMADA KEIKO(OTA KEIKO))  
 お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・リサーチフェロー  
 研究者番号：20508220

研究成果の概要（和文）：聖地メッカ、そしてその支配者であったシャリーフ（預言者ムハンマドの子孫）による政権の性格分析を通してイスラーム世界の政治文化のダイナミズム（動態）を解明することを目的とし、研究活動を行なった。具体的には対象時期を16～18世紀に設定、紅海貿易、メッカ巡礼などに着目し、一次史料の読解および記述内容の分析を行なった。また、あわせて海外における史料・史跡調査を行なった。これらの研究活動により、アラビア半島が前近代～近代に至るまで一貫してインド洋世界、地中海世界の結節点として重要な役割を果たしていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study of the Holy City of Mecca and its local political power, the Meccan Sharifate, suggests a unique model of Islamic sovereignty. They played an important role in the Islamic history both politically and economically. Because of their presence, the Arabian Peninsula worked as a connecting point of the Mediterranean and the Indian Ocean until the Modern Age.

#### 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,040,000	312,000	1,352,000
2010年度	940,000	282,000	1,222,000
総計	1,980,000	594,000	2,574,000

研究分野：東洋史（イスラーム史）

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：歴史学、東洋史、イスラーム史、アラビア半島、メッカ、シャリーフ、紅海貿易、巡礼

#### 1. 研究開始当初の背景

##### (1)研究開始の背景

7世紀のイスラーム勃興以来、メッカはイスラーム教徒にとって「世界の中心」であった。またシャリーフはイスラーム世界各地において広く人々の尊崇の対象であった。今日でも年間250万人以上のイスラーム教徒が巡礼月にメッカを訪れる。また10世紀にメッカに成立したメッカ・シャリーフ政権は20世紀初頭まで1000年以上も存続し、現在もこの王朝の系譜はヨルダン・ハシミテ王国、モ

ロッコ王国に受け継がれている。しかしながら従来メッカ研究では、a. イスラーム勃興期（W.M.Watt, *Muhammad at Mecca*, Oxford, 1953; P.Crone, *Meccan Trade and the Rise of Islam*, Princeton, 1986; 後藤明『メッカ：イスラームの都市社会』中央公論社、1991年）、b. 巡礼研究（D.F.Eickelman and J. Piscatory(ed.), *Muslim Travellers, pilgrimage, migration and the religious imagination*, London, 1980; 坂本勉『イスラーム巡礼』岩波書店、2000年）への集中が見られ、その政治的・経済的機能に焦点をあ

てた研究は少なかった。また紅海貿易に関しては、16世紀以降ヨーロッパによる「世界の一体化」が進み、インド洋、紅海などの地域経済圏については世界経済に吸収されていたとする論が支配的であり（K.N.Chaudhuri, *Asia before Europe: Economy and Civilization of the Indian Ocean from the Risen of Islam to 1750*, Cambridge, 1990; 家島彦一『海が創る文明』朝日新聞社、1993年）、一部の研究で18世紀カイロなどの大都市との関係において言及されるに留まっていた（A. Raymond, *Artisans et commerçants au XVIIIe siècle, Damascus*, 1973）。

## (2) 研究開始の動機

(1)のような研究背景に対し、本研究代表者は、聖地メッカとシャリーフ政権の性格をイスラーム全期（7世紀～現代）を通して分析することが、イスラーム世界の政治文化のダイナミズムを解明する上で不可欠であると考えた。そこで本研究においては16～18世紀を対象時期とし、紅海貿易とシャリーフ政権の関わりおよび紅海文化圏の諸港市の交流の実態を明らかにすることを通じて、従来の研究における時代的・地域的なミッシングリンクを補い、それによってイスラーム世界の地域の独自性、多様性を明らかにすることを試みた。

## 2. 研究の目的

本研究代表者はこれまで10～15世紀のメッカおよびシャリーフ政権を研究課題としてきた。対象時期を15世紀までに限定してきたのは、オスマン朝によるエジプト・マムルーク朝征服（1517年）、ヴァスコ・ダ・ガマによるアフリカ航路の発見（1498年）など、16世紀が政治・経済面での世界史上の一大転換期であり、16世紀以前と以降では研究視点を変える必要があったからである。本研究においてはこれまでの研究成果を更に発展させ、16世紀以降へと対象時期を拡大することにより、国際情勢変化、とりわけ大航海時代の到来がメッカおよびシャリーフ政権に及ぼした影響について考察することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) アラビア語の叙述史料、オスマン文書、ヨーロッパ人による旅行記などのヨーロッパ側史料をメッカ研究へと活用した。従来の歴史研究においてはアフリカ航路の発見により東南アジアとヨーロッパが直接結びつき、香辛料貿易の中継貿易であった紅海貿易は衰退に向かったとの論が主流であったが、

16世紀に新たに興隆したコーヒー貿易に着目し、国際商業とメッカ・シャリーフ政権の関係を解明した。

(2) クセイル、スエズ、トゥール（エジプト）、アカバ（ヨルダン）、ヤンブウ、ジャール、ジッダ（サウディアラビア）、アデン（イエメン）などの各紅海港市をトポグラフィ、歴史的発展過程、機能の諸側面から比較・検討した。考古学的調査研究の成果を補完的に利用し、紅海文化圏の諸港市の交流の実態を解明した。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の主な成果

#### ① コーヒー貿易に関する研究

アブド・アル・アズィーズ・イブン・ファフド（1516没）らによるメッカ年代記およびジャズイーリー・アル・ハンバリー（生没年不詳）の著作を取り上げ、その記述内容の読解・分析を行なった。その結果、16世紀前半にはメッカにおいてすでにコーヒー飲用の習慣が広まっていたこと、それに対してメッカのイスラーム学者の間で激しい法学論争が行なわれていたこと、その論争がメッカのみならず当時メッカに政治的覇権を及ぼしていたエジプト・マムルーク朝の対ヒジャーズ政策にまで影響を及ぼしていたことが明らかになった。

また、上記の作業と並行して、イエメン各都市（サナア、アデン、タイズ、モカ、ザビード、バイト・アルファキフ）におけるコーヒー貿易関連の史料・史跡調査を行ない、あわせてムハンマド・ジャズイム氏、ミシェル・トゥシュレール氏（いずれもサナア・フランス研究所、イエメン史）らとの意見交換を行なった（平成22年2月、於イエメン）。

#### ② 港町ジッダの研究

アラビア半島の港町ジッダが紅海貿易において果たしていた機能を解明するため史料読解・記述内容の分析を行ない、その成果を「港町ジッダと紅海貿易」の題目で報告した（平成23年2月、早稲田大学）。この結果、前近代～近代に至るまで一貫してジッダが国際商業において重要な役割を果たしていたこと、紅海文化圏がインド洋世界、地中海世界の結節点として機能していたことが明らかとなった。

また、上記の作業と並行して、インド洋に面したアラビア半島の諸港市（マスカット、ソハール、スール、サララ、タカ、ホール・ルーリー、ミルバート他）の史料・史跡調査を行なった（平成23年2月、於オマーン）。

#### ③ メッカ巡礼の研究

世界史におけるメッカ巡礼の意義を明らかにすべく 19 世紀まで対象時期を拡大、史料読解・分析を行ない、その成果を「19 世紀におけるメッカの「中心」性—メッカ巡礼とヨーロッパ—」として論文発表した（『人間文化創成科学論叢』第 13 巻、2011 年、39-47 頁）。この結果、メッカ巡礼は旧来のイスラーム世界観を強化する機能を担っていたのみならず、ヨーロッパ諸国によって構築された新しい世界秩序にイスラーム世界を組み込んでいく役割をも果たしていたことを明らかにした。

### (2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

#### ① 本研究の国内外における位置づけ

イスラーム勃興期および巡礼研究への集中という従来の国内外のメッカ研究の状況において、16～18 世紀を対象時期とする本研究は研究史上の地域的・時代的ミッシングリンクを補う位置づけにある。また、紅海文化圏を研究テーマとして扱う点にも本研究の獨創性がある。地中海研究、インド洋研究の分野においては多くの先行研究が存在するが、両者を結びつける紅海文化圏については今まで十分な研究が行なわれてきたとは言いがたい。文献史料に基づく研究に考古学的調査研究の成果を補完的に利用した本研究を通じて、イスラーム世界の総合的・包括的理解が可能となることに本研究の特色がある。

#### ② 本研究のインパクト

コーヒー貿易の実態解明を通じて、近代以降においても紅海貿易が継続して行なわれていたこと、その中でメッカ・シャリーフ政権が主体的な役割を果たしていたことがあきらかとなった。

また、各紅海港市の諸側面からの比較・検討を通じて、紅海文化圏が独自の伝統的構造、統合的ネットワークを保持していたことが明らかとなった。

これらの研究結果により、16 世紀以降、地域経済はヨーロッパによって構築された世界経済に吸収されていったという、近代史研究に見られるヨーロッパ中心史観に修正が加えられ、イスラーム世界の地域の独自性、多様性が明らかとなった点に、本研究の研究上のインパクトがある。

### (3) 今後の展望

18 世紀末以降、ヨーロッパ諸国による世界各地の植民地化が進行するにつれ、植民地支配下のイスラーム教徒をどのように統制するかが喫緊の課題となってきた。こうした状況下において、各国は様々なメッカ巡礼政策を実施、ヒジャーズ地域の重要性はますます高

まった。また、オスマン朝の支配下に置かれていたヒジャーズ地域においてはイギリスのメッカ・シャリーフ政権に対する軍事支援を機にいわゆる「アラブ反乱」が起きるなど、世界史におけるアラビア半島の重要性はますます増大していった。今後の展望としては 19 世紀以降へと時代的視野を拡大し、主にヨーロッパとの関わりの中でメッカ、およびシャリーフ政権がどのような役割を果たしていったのか、また 16 世紀以降も存続していた地域文化圏である紅海文化圏が帝国主義、植民地主義の時代にどのような変容を遂げていったのかを解明する。この時期は英国下院議会文書など、ヨーロッパ側の文書史料の利用可能性も高まるため、更なる研究の深化が期待できる。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

(1) 太田啓子 「19 世紀におけるメッカの『中心』性—メッカ巡礼とヨーロッパ—」『人間文化創成科学論叢』第 13 巻、2011 年、39-47 頁。（査読有）

(2) OTA Keiko, “The Meccan Sharifate and the Red Sea Trade: The Rise of Jidda as an Entrepot Port and the Policy of the Mamluk Dynasty toward Hijaz,” *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 26/2, 2010, 214-220.（査読有）

〔学会発表〕（計 4 件）

(1) 太田啓子 「港町ジッダと紅海貿易」特色ある共同研究拠点の整備事業・早稲田大学イスラーム地域研究機構 拠点強化事業『「モノ」から見た知の技術と生活文化の変容と交流』研究会、平成 23 年 2 月、早稲田大学

(2) OTA Keiko, “The Meccan Sharifate and the Red Sea Trade: The Rise of Jidda as an Entrepot Port and the Policy of the Mamluk Dynasty toward Hijaz,” Japan Center for Middle Eastern Studies Seminar, “Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art,” November, 2010, Japan Center for Middle Eastern Studies in Beirut (Lebanon).

(3) 太田啓子 「メッカ・シャリーフ政権と紅海貿易—中継港ジッダの興隆とマムルーク朝の対ヒジャーズ政策—」平成 21-25 年度科学研究費補助金 基盤研究 S 「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」研究会、平成 22 年 7 月、東京大学

(4)太田啓子「19 世紀中葉におけるメッカの「中心」性—メッカ巡礼とヨーロッパ—」平成 21-25 年度科学研究費補助金 基盤研究 S「ユーラシアの近代と新しい世界史叙述」研究会、平成 22 年 6 月、東京大学

〔図書〕(計 1 件)

(1)太田啓子、他、岩波書店、『世界史史料 2 南アジア・イスラーム世界・アフリカ』2009 年、211-213 頁。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

山田 啓子(太田 啓子)(YAMADA KEIKO(OTA KEIKO))

お茶の水女子大学・大学院人間文化創成科学研究科・リサーチフェロー

研究者番号：20508220

### (2)研究分担者

無し

### (3)連携研究者

無し